

2022. 11. 27 (日) 使徒6 : 5～7

6:5 この提案を一同はみな喜んで受け入れた。そして彼らは、信仰と聖霊に満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、そしてアンティオキアの改宗者ニコラオを選び、

6:6 この人たちを使徒たちの前に立たせた。使徒たちは祈って、彼らの上に手を置いた。

6:7 こうして、神のことばはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った。

<説教>

エルサレムの教会で〈弟子の数が増えるにつれて〉、教会内に起きた問題のことは見えています。初代教会は、大祭司たちサドカイ派を中心とした人々からの迫害にも負けず〈人に従うより、神に従うべきです〉と力強く告白し証し、イエスがキリストであると教え、宣べ伝えていました。そして、ある問題を通して、その教会自身が神に従うこと、神のみどころにかなうことは何かを深く顧みなければならない事態に直面していました。それは〈ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情が出た。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給においてなおざりにされていたからである。〉(6:1)という問題でした。もちろん、放っておいていい問題ではありませんでした。それは一番弱い立場にあった〈やもめたち〉のためでもあり、また同時に、使徒たちのためでもありました。使徒たちのためとは、〈弟子の数が増え〉過ぎて、もはや〈毎日の配給〉のために使う時間と労力には限界が来た十二人の使徒たちのためということです。使徒たちが〈毎日の配給〉のための物資や食料を管理することは、たとえ使徒たちがそれを喜んで行って行っていたとしても(実際そうでしたが)、その結果彼らが〈神のことばを後回しにして、食卓のことに仕える〉(6:2)ことになってしまっていました。それは〈良くありません〉、つまり彼らを〈祈りと、みことばの奉仕に専念〉(6:4)するように任命なさった神に喜ばれない、神のみどころにかなわないことだったと使徒たち自身が自らを省みて気づいたに違いありません。

使徒たち自身がそのことに〈心を刺され〉、神に「私たちはどうしたらよいでしょうか」(cf.2:37)と必死に祈ったに違いありません。そして神から知恵を与えられてある〈提案〉(直訳「言葉」)を〈兄弟たち〉に語りました。それが、「あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。その人たちにこの務めを任せることにして、私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」ということでした(6:3)。このとき使徒たちはまた聖書を調べ、聖書に学びもしたに違いありません。「あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。」という言葉は、かつてモーセが荒野でモーセと共に働く〈長〉を選んだ出来事を思い起こします(出エジプト 18章)。モーセはしゅうとイテロの忠告を聞いて、〈民全体の中から、神を恐れる、力のある人たち、不正の利を憎む誠実な人たちを見つけ、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として立て〉(出エジプト 18:21)て、彼らがモーセとともに重荷を負う(同 18:22)ようにしました(これがいわゆる教会「役員」の起源と考えられます)。またやはりモーセが神に「私一人で、この民全体を負うことはできません。私には重すぎます。」と訴え

たとき、神がモーセに「イスラエルの長老たちのうちから、民の長老で、あなたが民のつかさと認める者七十人をわたしのために集めよ。…彼らも民の重荷をあなたとともに負い、あなたが一人で負うことはなくなる。」と言われ、モーセがそのようにしたということもありました（民数記 11 章）。さて、教会の中から、教会の兄弟たちによって選ばれるべき七人は〈御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たち〉と使徒たちは教えました。〈御霊と知恵に満ちる〉にはやはり常に神のみことばに聞き、神に祈ることが絶対に必要です。〈任せ〉られた〈務め〉を忠実に果たすためには〈務め〉に必要な賜物を常に神から与えられていなければならないからです。〈評判の良い〉と訳された言葉は「証言されている」という意味の言葉です。他の人から「あの人は御霊と知恵に満ちている。どう見ても、常に聖書から学び、神に祈っている。毎日の配給の奉仕にふさわしい。」と他人が証言する人です。「仕える」「務め」の性質上、「私こそは御霊と知恵に満ちている。私こそはふさわしい。」と自分で自分を推薦する人ではないということでしょう。そういう、「務め」にふさわしい人たちを教会の中から、教会の人々自身で推薦し合い、証言しあって〈選びなさい〉「捜し出しなさい」ということです。

ではそうやてお互いの中から捜し出し、選ばれた人が即、「務め」を始めるのかということとそうではありません。次には、使徒たちが〈その人たちにこの務めを任せることにする〉、つまり使徒たちによる「任命」が必要だとしたのです。言わば二重のチェックというか手続きが必要としました。それは神の前での慎み、慎重さであり、また選ばれたことが確かに神の召しによるという確認のためでした。

そうやって使徒たちは彼らが本来神によって召され、任命された〈祈りと、みことばの奉仕に専念〉できると〈提案〉したのです。確かにこの〈七人〉は、使徒たちが〈祈りと、みことばの奉仕に専念〉できるために、いやむしろ使徒たちを〈祈りと、みことばの奉仕に専念〉させるために、使徒たち以外の兄弟たちの中から選ばれ、使徒たちによって任命される必要があったのです。

〈この提案を、一同はみな喜んで受け入れ〉（直訳的には「この言葉は一同みなを喜ばせた」）ました。〈一同はみな〉、この使徒たちの言葉が神のみこころにかなう、神に喜ばれる良いこと―〈良くない〉（6:2）の逆―だと分かりました。だから〈一同はみな喜んで〉使徒たちの言葉を通して示された神のみこころに従ったのです。

そうやって選ばれた七人（6:5）を〈使徒たちの前に立たせ〉、使徒たちは〈祈って、彼らの上に手を置〉きました（6:6）。今日で言うところの「任職式」です。神が〈務め〉に召してくださったので、そのために必要な聖霊と知恵はますます神が与えてくださいます。そう約束してくださる神に信頼して祈り求めました。〈手を置く〉ことも聖書から、また主イエスから学んだことでした。それは神の祝福を祈るものでした。モーセもヨシュアに手を置いて任命したのでした（民数記 27:18-23）。すでに「個人的」には〈御霊と知恵に満ち〉ていた七人が、この「任職」によって「公的」な〈毎日の配給〉〈食卓のことに仕える〉務めを始めたのです。

こうして〈十二人〉の使徒たち、他の〈弟子たち〉〈兄弟たち〉、つまり教会はただ神のみこころを必死に求め、祈り、聖書から学び、問題に正しく取り組みました。〈苦情〉の問題がその後どう解決したのかは具体的にはここでは書かれていません。しかし確かなこと、そして大事なことは、〈こうして神のことばはますます広まっていき、エルサレム

で弟子の数が非常に増えていった」ということです。あれほど強硬に、頑固に反対していた〈祭司たち〉の中からすら〈大勢、次々と信仰に入る〉者が出てきたとは驚くべき、神の力、神のみわざです。これも教会が神のみこころを求め、神のみこころにかなった「務め」人を選び、任命し、また使徒たちを〈祈りと、みことばの奉仕に専念〉させるようにしたからです。そうやって〈神のことば〉に従って、〈毎日の配給〉の〈務め〉を神の御前に忠実に果たし、〈神のことば〉を特に使徒たちが、そして使徒たちだけでなくこの七人も宣べ伝え、証したのでした。そうやってエルサレム教会は神のことばに聞き従い、神のみこころを行い、神の栄光を現す教会となっていったのです。

五旬節（ペンテコステ）の日、十二使徒たち及び120人ほどの弟子たちの上に聖霊が力強く圧倒的な力をもって臨みました。そのとき皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、神の大きなみわざを語り始めました。彼らは主イエス・キリストの（復活の）証人として、イエスのことを語り、神のみことばを語り始めました。とりわけ、「わたしの羊を牧しなさい」「わたしに従いなさい」とイエスに召された（ヨハネ21章）ペテロを筆頭とした使徒たちがみことばの説教、教えに当たりました。その数が三千人ほどとなったエルサレムの教会は、いつも使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていました(2:42)。彼らはみな一つになって、一切の物を共有し、財産や所有物を売っては